

## あとがき

「はじめに」でも触れたように、わたしは本当はファンタジーかSFを書く作家になりたかったのです。小さい頃から主に日本の児童文学の書き手によるファンタジーを数多く読んできていて、そうしたところから影響を受けていたのだと思います。(もちろん、ファンタジーを読むようになったのは、親が買い与えてくれたからです。) もっともこの面での才能はないなと思ったので、今は別な仕事をしているのですが。でも、最初に引いた小谷真理さんのことばによれば、この本も別の形ではあるけれど、「物語を書いた」ということになるのかもしれませんが。

執筆にあたって、「締切は(なるべく)守る」のがわたしのモットーだったのですが、今回は大幅に最初に打ち合わせした期限を越えてしまいました。出版社の方々にはご迷惑をおかけしたことと思います。やっぱり一本論文を書くのと、一冊分の原稿をまとめるのとでは、全然作業の質が違いました。いい経験をさせていただきました。

でも、構想を練ったり執筆したり修正したりしていたおよそ一年ほどの期間は、大変なこともありましたが(特に職場で激職と言われるポストに割り振られたこともあって、時間がなかなか取れませんでした)、楽しいこともたくさんありました。まず、「本を書くため」と称してファンタジーをたくさん読めました。弱点だった女の子向けの文庫も数多く読みました。古本屋めぐりをして、もう書店では売っていない昔の作品を探したのも楽しい経験でした。DVDを買って『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』を繰り返し観たり、「スレイヤーズ」や「セーラームーン」といった昔のテレビアニメをもう一度おさらいしたのも、どれもこれもみんな「執筆のため」です。こんなことをしているから、「趣味を仕事にしている」と以前ニフティで言われたんでしょうね。

そう、この本の文章は、最初ニフティのフォーラム会議室(ウェブへ移行する前の、いわゆる「パソコン通信」の時代のもの)に連載したり書き散らしたものがけっこうあります。そのうちのいくつかについては、大学の講義(福島大学行政社会学部「生活文化論」、カリキュラム改革以降は「ジェンダー論」)で話してから、学部の紀要に研究ノートというかたちでまとめています。

- ・『『男装の麗人』 ポピュラー文化のジェンダー分析』、『行政社会論集』、一九九八年。
- ・「ファンタジーのジェンダー、ジェンダーのファンタジー ポピュラー文化のジェンダー分析・続」、『行政社会論集』、一九九九年。

ただし本書執筆にあたっては、第2章の一部を除いて、ほとんど原型をとどめないまでの訂正・書き直しと、構成の変更を行なっています。

原稿を書いているにつづく思ったのは、「文章を書く」ということは「協同作業」だなあということ。いろいろな人の声が重なり合っているからです。以下、お世話になった方々への感謝の言葉です。

ニフティサーブの会議室でコメントをくれた人や、講義で相手をしてくれたりレポートに熱心に取り組んでくださった学生の皆さん。特に、バイト先等で話し相手になってくれた工藤弘陵さん。

ファンタジーの「作り手」になった経験も貴重でした。テーブルトークRPG「ソードワールド」と一緒にプレイしてくれた伊藤早智子さん、橋本直人さん（神戸大学）、広瀬さん、干場力さん、松井利美さん、山下玲子さん（武蔵大学）、和田さん、その他の方々。三つめのキャンペーンでできた「ミリエル」は、いまはなぜか研究室のサーバの名前になっています。

同僚たちからもさまざまな刺激を受けています。いろいろと児童文学系ファンタジーを貸してくれた同僚の鈴木めぐみさん（国際法）、鈴木さんや辻みどりさん（イギリス文学・イギリス文化研究）と話していると、ハビトゥス形成の違いをつくづく痛感させられます。SFファンの加藤眞義さん（社会学）には、本書のテーマをめぐってしばしば雑談の相手をしていただきました。永幡幸司さん（サウンドスケープ論）からご専門についていろいろご教示いただいたこともひそかに本書の中に生きていたりします。また、青弓社ライブラリーにお書きになっている坂上康博さん（スポーツ史・スポーツ文化研究）には、青弓社を紹介していただきました。

矢野恵二さん、芝原三裕さんほか青弓社の方々。冒険的な試みをよくぞしてくださいました。まさかほんとうに書くことになるろうとは。ましてや青弓社といえば、学生時代によく読んでいた哲学・思想系の雑誌『クリティーク』を出していた出版社です。思いもよりませんでした。当初編集を担当していただいた芝原さんには、とかく近視眼的になりがちな執筆をいろいろとファンタジー論の現在に位置づけてもらったり、内容にかかわってさまざまなアドバイスをいただきました。よくわたし自身、学生の卒業論文や修士論文などにコメントしながら、書き手にはわからないその論文の短所・長所を指摘していくことがあります。それをやってもらったという感があります。根気よく最後までおつきあいいただいた矢野さんにも感謝です。

そのほか、お茶の水女子大ジェンダー研究センターの「フェミニズムと現代思想」研究会で一緒にした方々。特に、第4章後半のアウトラインを聞いて「面白そう」と言ってくださった小谷真理さんには、一番の感謝を。とても勇気が出ました。ありがとうございます。実は「どこかで“世界”を意識するように」と言われてずっと悩んでいました。結局は日本に固有な話になってしまいましたが、今回執筆のためにいろいろ調べていると、いたるところで小谷さんの名前に出くわしました。小谷さんのすぐれた評論は、ずっとあこがれの的でした。きっとこれからもそうでしょう。

なお、執筆にあたって具体的に念頭にあった「読者」は三人です。一人は「はじめに」で触れたセリフを口にしてくれた若本伸子さん。あのひとことがなかったら、この本は影も形もありませんでした。本当に感謝しています。答えをきちんと出すまでに十五年もかかってすいません。

でも、わたしにとってはまだ昨日のことのようです。

二人目は佐藤良子さん。「ラスと闇主って、美夕とラヴァだよね」というような会話は身近ではあなたとしかできませんでした。X文庫やコバルトをたくさん貸してくれてどうもありがとう。お礼に本書を一冊進呈します。佐藤さんの修士論文とわたしの原稿とどっちが先に終わるか、などという不毛な競争心も燃やしましたが、どちらも延長戦に突入してしまい……。どうぞ大学院を修了しても元気でいて下さい。

三人目は「いつき」さん。ファンタジーが大好きなあなたが、将来大学生ぐらいになってからこの本を手にとってくれるとうれしいのですが。だけどたぶんパラパラめくって、ちろ～んとした目で見て、「ふーん」で終わりだろうなあ。(笑)

最後に、そのほかこれまでの人生でいろいろとお世話になった方たちへ。もしご縁がありましたら、いつかどこかで何かの形で、またお会いしましょう。どうもありがとうございました。

2004年7月14日

高橋 準

執筆中の主なBGM：Anthony Phillips, *The Geese and the Ghost*

Clannad, *Magical Ring*

Enya, *Shepherd Moons* (including "Loslorien")

西村由紀江、『Angelique』

葛生千夏、『The Lady of Charlotte』

遊佐未森、『ハルモニオデオン』

など